
奴隸少年

西森 恭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隷少年

【Nコード】

N9166X

【作者名】

西森 恭

【あらすじ】

アルカトという国には学園があり、そこには毎年多くの学生が勉強や部活動、そして魔術鍛錬に励んでいる。

ここに一人の少年が入学することとなった。名はキール。彼の登場から物語は始まる。この国と、彼のまだ知らない国の運命をかけた戦いの物語が…

1（前書き）

この小説を閲覧していただき誠にありがとうございます。ニシノモリキョウ西森恭と言います。

今回初めて作品を投稿することになります。まだまだ至らない点ばかりだと思いますが、精一杯努力します。また、もしよろしければ感想やレビューを書いてくださると嬉しいです。

次のページから物語が始まります。どうか最後までお付き合いください。

2011/10/25 掲載

アルカトという国は2つの大国に挟まれるようにして成っている。アルカト南部はサクラ湖に面し、また緑が多いため農業や林業が主な収入源であり、反対に北部では工業や商業そして魔術研究が発達しており、これは他国を結ぶ関所があることが理由に挙げられるだろう。また四季に富んでおり、毎年多くの観光客がこの国を訪れる。

このように現在のアルカト国は表向き民主的な社会となっているが、10年前までは絶対王政を敷いていたのであった。その特徴の一つというのが、【奴隷制度】である。目的としては労働力の確保および身分階層の分化のためであり、戦争の捕虜やそれによつて占拠された土地に住む平民の略奪、そして債務の不払いを行つた平民あるいは貴族階級の国民が主な奴隷の対象であつた。

しかし、この王が退位のち、新たにその息子が王の座に就くことになる。が、かれは主権を国民に渡すと公言し、自ら進んで城を出た。そのうち王家にながく仕えていた人物であるコゼット婦人、アルフ公、マリウス公が三権を分けて国を動かすこととなり、現在に至っている。

民主主義国家となつた【アルカト】。しかし王政時代の爪痕はまだ残っている。「奴隷」。かつてその身分であつた者への迫害が続いているのだ。そして彼らは貧民街と呼ばれる薄汚れた街に住むか、故意に捕まって監獄の中で暮らすか。その二択しかなかった。10年経つた今でも元奴隷身分の社会的復活はみられていない。

その家系は途絶えようとしていた。

【ブライト家】。アルカト国における中流貴族。

主に農産業をおこない、品種改良等の研究の傍ら、当主の趣味で【魔導キカイ】の開発もおこなっていた。地域の農民や農奴にまでも親しみを込め、接してきた。

その当主の死後、彼の息子が後を継ぐがもとより彼は農業にはまったくの興味は持たず、下流の人間には卑賤な存在と認識しており、特に農奴という存在自体に嫌悪し、この土地から離れたがっていた。彼は賭博が好きだった。単調に無意味に過ぎていく田舎臭い土地に唯一の興奮や喜びを与えてくれる、スパイスいや、麻薬に彼はのみこまれていく。

増える借金。

凶作。

取り立て屋。

彼は恐れを抱くようになった。農民にも召使にも。愛すべき息子や妻にさえも。彼にとって人、それ自体が敵に見えてきたのだ。

- ある日、彼は屋敷のホールでナイフを片手に血を流して死んでいた。彼は自殺とされ、民によって丁寧に埋葬される。

死体を見つけたのは1人の村人であつたらしいが、どういうことがその時屋敷には誰もいなかったそうだ。夫人や子ども、執事など全員がだ。

噂が村では飛び交つた。夫人が博打に嵌つた夫に愛想尽きて殺したとか、その日に訪れていたという見知らぬ幌馬車に乗った人が一枚噛んでいるとか。

ただひとつ確かに言えることは、今もなおこの屋敷には誰も住む者はおらず、民もまた近づくものもないということだけだ。

ゴトトン ゴトトン

幌馬車 ゆれる

みんなを のせて

幌馬車 ゆれる

ゴトトン ゴトトン

悲鳴を 上げる

それは車輪の音であり

また人々の狂喜の声

あるいは人の狂気かな

「へったくそな歌だねえ」

「悪かったっすね」

薄暗くなった野道を幌馬車がゆっくりと進んでいた。

「しかしあのおっさんもしつこかったねえ」

「子どもだけで許されるとでも思ったんすかね」

「おっさんのあの借金は【これ】だけじゃあすまないほどの額だからねえ。でもこれだけで済ませるんだから、ぼくは心が広いと。そう思わないかい？」

「半々っすね」

「ほう何故かね」

「彼ら2人でもよかったのに、ほかの人たちとまで遊んじやったからですよ」

「そもそも君がもつとしつかりとしていればなんのことは無かったですよ？」

「うう…すみませんっす」

「フッフ…まあ小言はこれまでにしましょう。さあ朝までには市場に着けるようにしてくださいよ？」

「了解っす」

幌馬車 ゆれる

「うたつのをやめなさい」

「ちえっ」

傍から聞けばそれは2人の男の他愛ない会話。だが一つ一つの言葉を聴くに違和感が残る。そして違和感はいく馬車にも見られた。後ろは布で隠されており、前からわずかに見える程度なのだが、幌の中に鉄の棒が数本立てられているようなのだ。しかもそれらは馬車が揺れても隊列を崩れたりせず、しっかりと立っている。固定されているようだ。その鉄の棒と棒の隙間を、ときどき片方の男が覗き見、そしてまた前を向く。幌の中には棒の他にも何かがあるのだろうか？光が閉ざされたうえに夜半であるため中ははっきりとは見えない。だが、確実に何かがあるのだろう。

数時間経て、彼らは市場にたどり着いた。夜明け前であった。

3 (後書き)

〕 導入篇・完 〕

＊（４月８日 午前７時２５分）

その日の朝はやけに空が青く澄みきっていたとキールは覚えている。昨日初めて腕を通した制服は少し違和感があり、固い。片手に提げた鞆に重みを感じる。靴も新調してもらった。今までのだと少々変だ、ということだった。

これから学園へ行くのだ。生徒になるのだ。多くの人に会えるのだ。友達ができるのだ。あらゆる期待が彼を興奮させた。

腕時計を見る、７：３０。まだ時間には余裕がある。少し寄り道でもしようか？そう考えていた矢先、誰かにぶつかった。

＊＊（同日午前７時００分）

どうやらあいつは先に行ってしまったみたい。せっかく一緒に行つてあげようと思っていたのに、というか出るのが早すぎやしない？はやる気持ちはわからないでもない。あいつは今まで私以外の同じくらいの歳の子と話す機会など滅多になかったし、いつもより長く外に出ていられるから。

でも私はまだ朝食をすませてない。

「ごちそうさま」トーストを食べ終わるとどこからともなく白い顎ひげを蓄えた執事がティーポットを持ってきて、「食後に、いかがですか？」と礼儀正しく聞いてきた。

「ありがとう。しばらくはシラカワさんのお茶が飲めないのね」

執事の名前はシラカワという名で、爺様の代から仕えているらしい。しかし彼の謎は数あつて、不思議な雰囲気を漂わせてる。でも特筆すべきは彼が入れてくれる紅茶はすごくおいしいということだろう。

「お褒めいただき光栄です、が。少しくすぐつとつございます。1週毎にはお戻りになられるのでしたな」

「うん、完全寮制みたいだから。…ごちそうさま。それでは白河さん、いつてまいります」

「お気をつけていつてらっしゃいませ、ティナお嬢様」

通学途中、ティナはキールとの出会いを思い出していた。それは6年ほど前のこと。当時ティナとキールは9歳だった。シラカワさんの後ろで彼は落ち着いていたように思う。見知らぬ人間、しかも上流貴族の住む屋敷に連れてこられたのだ。普通ならば緊張するか、物珍しさであたりを見渡すか、そんな動作があるのだろうが、キールにはそれがなかった。

とても、落ち着いていた。

「はじめまして。これからよろしくお願いします」

おそらくシラカワさんから言われたであろう言葉を彼は当主である私の叔父

「いらつしゃい。きみがキール君だね。こちらこそよろしく。ほら、ティナちゃん。きみも挨拶なさい」

「…よろしく」

「はい、ティナお嬢様」

「つんともう。どこまで行ったのよ、キールのやつ」

「えっと、7時25分か。てことはもうあいつは確実に着いちゃってるわね。あーあ…時間も30分ほど余裕あるし、どっか寄り道しようかな」

* (同日午前7時33分)

「あ、申し訳ありません。ぼーっとしてました」

ぶつかった相手に失礼のないようにキールは謝った、が。ぶつかった相手が悪かった。その男はバリバリに固めた髪をして、両腕に刺青をほどこした、最近では全く見られない典型的な不良だった。

そんな男にぶつかったキールは今、路地裏で男と話をしている。

「おう兄ちゃん。さっきはよくもなめた真似しやがったな」

「すみません。どうやら聞こえていなかったようですね。改めて申し訳ありませんでし…」言い終わらないうちに男は突っ掛ってくる。「今はそんな言葉ア垂れる時じゃあねんだよ！誠意だ！誠意を示さねえ限りなんにも解決しねえし、だあれも幸せにはなれねえ。だから、な。ここまで言えば分ってくれるだろ？兄ちゃんよお」

ああ、彼はただこれにかこつけて金を要求しているのだ。

できることなら平和的解決が望ましい。キールは制服のポケットから財布を取り出した。

「これが全財産です。どうぞお受け取りください」

執事見習いのにきに習った誠心誠意込めた辞儀をして財布を差し出した。傍からみれば完全に男が制服の少年という弱者から金品を巻き上げているように見えるだろうが。

「へへっ、兄ちゃん物わかりがいいな。さて中身は…なんだこりゃ？銅貨が20枚あるだけじゃねえか！くそっ、なめやがって！」

「申し上げた通り、持っているお金はそれがすべてです。どうかそれでお引き取り願いたい」

「ふざけんな！そういえば…さっきからやけに礼儀正そうとしゃがんな。さてはどっか上流階級の人間か？」

「……………」

「沈黙ってことは当たりか？はっ！ちょうどいい！いちゃもんつけて手前の家からこっそり金をもらっておいてやる！」

声のした方向は上。目線を上げると同時に学園指定の靴が目前に迫っていた。突然の事なので男は避けることができず、

「ぶぎっ」

情けない声を出して顔にくらった。そのまま建物の壁にぶつかり、ずるずると身を沈めていった。沈黙。しばらくは動かないだろう。

「さ、今のうちにさっさと行くわよ。キール」

藍色の髪をすっとかきあげ、彼女は美しい動作でキールに手をさしのべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9166x/>

奴隸少年

2011年11月30日20時05分発行